

昭和館開館二十年を迎えて

歴史は時の権力者の動きや大きな事件を通して語られることが多いようです。しかし、それぞれの時代において、庶民がどのよう暮らし、どのような苦しみや悲しみを味わったか、庶民の感情が時代の動きにどう影響を与えたか、といった視点で歴史を考へることも劣らず大事だと思います。戦争に関して言えば、戦争がなぜ起こり、どう戦われ、なぜ敗れたかを学ぶと同時に、戦争によって、庶民がどんな暮らしを強いられ、いかに苦しみ悲しんだか、また、庶民自身が戦争をどう受け止めどう反応したか、について掘り下げて考えることも重要なことではないでしょうか。

昭和館は、戦中・戦後の庶民生活の労苦を後世に伝えることによって、平和の尊さを訴えるという使命を担って平成十一年三月に開館し、今年、開館二十年の節目の年を迎えました。この機会に、改めてこれまでの歩みを振り返り、課題を問い直して、さらなる充実発展を期したいと思います。

おかげさまで、来館者は年々増加傾向にあり、戦後七十年に当たる平成二十七年度には五十二万人を超え、その後も順調に推移しています。なかでも、小・中学校生の来館が年を逐うて増加していることは、次の世代への戦争体験伝承の重要性という観点から喜ばしいことだと思います。しかしながら、全国的にみるとまだ昭和館を知る人は決して多くありません。今後とも、展示など内容の充実を図るとともに、新しい情報技術も駆使した広報活動にも力を入れ、まず昭和館をより多くの人が知り来館してもらえるよう努力したいと思います。

戦後生まれが国民の八割を占め、もはや戦後ではないと言われた昭和三十年頃までの時期を経験した人さえも少数派となった今、自らの体験としては戦争も戦後の苦労も知らない世代に、当時の庶民生活の実情を伝えていくことは決して容易ではありません。広島、長崎に原爆が投下されたことは知っていますが、全国各地にこれだけの空襲被害があったことは昭和館に来て初めて知ったという児童・生徒が少なからずいます。当時を知らない世代にも戦中・戦後の庶民の暮らし向きやその思いが生き生きと実感を伴って伝わるよう、さらなる創意工夫が必要です。より多くの資料の収集や展示閲覧方法の改善に努め、当時の人々の息遣いが感じられる展示や資料閲覧を目指していきたいと思えます。とくに、体験者の生の声を記録し、あるいは、それを語り継ぐ人を育成することは、今だからできることであり、今やらねばならないことだと思っています。その意味で、オーラルヒストリーの作成や語り

部育成事業にも、いつそう力を入れなければなりません。昭和館が戦中・戦後を経験した人とその後の世代とをつなぐ橋渡しの役割を果たす、そういう心構えで取り組んでいきたいと思っています。

昨年は明治維新百五十年、今年はそのから新たな一步を踏み出す年です。百五十年というのは、明治維新から先の大戦までの七十三年そして戦争の期間四年間をはさんで戦後の七十三年ということでもあります。戦前の七十三年が幾度かの戦争を経験したのと対照的に、戦後の七十三年は我が国にとって戦なき歲月でありました。また、間もなく平成の時代が終わりますが、平成の時代は明治以降四つの年号のうち、唯一我が国が参戦することのなかった時代として記憶されることになるでしょう。あらためてそのことに思いを致し、戦後七十三年の、そして平成時代の平和の歩みが次の時代に確かに引き継がれることを願います。昭和館が小・中学生を対象に毎年実施している作文コンクールの入選作品のなかに、館を見学して、「戦争をしない」と、「戦中戦後を生き抜いた人々の苦労があったからこそ今の自分がある」ことを強く感じたとき、「過去を変えることは出来ないけれど、未来は自分たちの手で変えることが出来る」と平和を自らの力で築く決意を述べた文章がありました。昭和館の意図するところがこの世代の心に届いたことを嬉しく思ったことでした。当時の庶民が置かれた過酷な状況を知って驚き、防空壕体験などで空襲の恐ろしさを感じるところから、当時の人々の苦労や恐怖を想像し、戦争の悲惨さと平和の尊さに思い至る。「学ぶ」とは、「驚き」「感じ」、それによって「想像し」「考える」ことではないでしょうか。

開館二十年を迎えて改めて思います。「昭和館を、単に懐かしいだけの、思い出に浸るだけの館に終わらせてはいけません。平和の尊さがしっかりと認識されるよう、時の経過とともに薄れ行く戦争についての庶民の記憶を風化させることなく伝えていく、この変わらざる課題のより良き実現に向けて職員一同不断の努力を重ねていく所存ですので、皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いたします。



昭和館館長

羽田信吾